

飽かぬやいつの寝乱れ髪

——禅竹の考えた玉鬘像——

三宅晶子

玉鬘十帖は、『源氏物語』の中で独立した感じのする物語である。光源氏は三十六歳、太政大臣の位につき、政治の中心にいて多忙を極めるという生活ではなくなっている。壮大な六条院の造営が完成し、四季の町にそれぞれの女主人が移り住んで、理想的な生活が営まれつつあった。四年後の女三宮降嫁によるその崩壊前の、しばらくの平穏な時期である。玉鬘十帖の物語の特色は数々あるが、その第一として指摘したいのは、玉鬘は突然やつて来て、また突然いなくなってしまう、そのことが体制にはなんの影響も与えなかったという点であろう。それだけに彼女の思い出は美しく残り、何とかならなかったのかという残念な後味とともに、鮮やかな印象を残して、物語の中心から退場するのである。

足かけ二年間、六条院の最もいい時期に、玉鬘は六条院に居たことになる。そこで最高に贅沢で最高に雅な生活を体験し、吸収し、成長する。理想化された風雅な生活の中で、季節の移ろいととも、玉鬘はだんだん洗練さ

れ、魅力を増して行く。その様子が、光源氏の眼を通して描かれて行くのである。

源氏は玉鬘と近しく接して、その山吹の花にたとえられるような明るい華やかな美しき、「気近く今めきたる（近づきやすく現代風）な人柄（蜚巻）、頭の良さなどに惹かれていく。どうすれば一番いいのか、兵部卿官など誰か適当な男と結婚させるか、尚侍として冷泉帝に入内させるか、自分の愛人にしてしまうか、思い迷う源氏が描かれている。

源氏がそこまで愛情を傾ける玉鬘を自分のものにしなかつた理由は何だったのだろうか。まず根本的には、紫式部はこの物語を、完全に入れ籠式に独立的に扱いたかつたからなのではなからうか。源氏の政治力や経済力、将来性などの社会性を抜きにして、純粹な男性的・人間的魅力を余すところなく引き出しているのが、玉鬘十帖である。続く女三宮関係の物語群における、老いを自他ともに意識し始めている、権力志向で、貴種好みで、若い女が好きな、滑稽でかなりいやらしさの目立

つ中年男、の源氏とは対照的な、すべてにスマートで、好人物の源氏である。季節は推移しているにも関わらず、六条院の、源氏の周りだけは時間が止まったままのような、理想郷での日常生活である。

そのような理想郷において源氏は、純粹に玉鬘を愛する。玉鬘も、対社会的な意識の上では「うとましく」思っている、根本的には源氏を許し、慣れ親しんでいる。

ようやく涼しい秋風が吹いた立秋のころ、そのころは和琴を教えるという口実で、源氏はしばしば玉鬘のもとを訪れ、一日中共に過ごしている。そんなある晩、夜更けに二人は琴を枕に添い臥しする。この場面は玉鬘十帖の中でも、特に非現実的で、幻想的な場面である（篝火巻）。他人の介入しない美しい時間を、共に過ごす二人の様子が、さりげなく、しかし印象的に描かれている。

光源氏と玉鬘の関係は、第三者を介在させない、隔絶された世界にいる限り、相思相愛の間柄であつたことを、紫式部は周到な計画のもとに、細心の注意を払って、丁寧に描いている。しかしそれはあくまでも、「もしも」という仮定であつて、現実には源氏は紫の上以上の扱いはできないという分別に縛られているし、玉鬘の方は、源氏は養い親であるという常識に捕らわれている。玉鬘の恋の相手が誰かという視点で玉鬘十帖を分析してみると、光源氏以外あり得ない。大切なことは、現

実のこととしては、自分にも相手にも「許さない」恋であるということである。

禅竹が目を付けたのは、そういう玉鬘の懊惱している心の奥の奥のことである。

玉鬘という人は、聡明な人という設定である。いつもきつちりと現実を見据えていて、自分や相手の感情に流されることなくどうすべきかを考え、割り切って対処できる人である。だから髭黒の正妻となつて、多くの子供を育てて、継子にまで慕われる。一般的には、当時の女性の生き方としては大成功であると評価することができのさう。しかし、それでもやはり、玉鬘はあまりに賢すぎてなんだかつまらない気がしてならない。この人はそれで本当に満足だったのかと。

禅竹も同じことを感じたのではなかつたらうか。禅竹という人は、女心のわかる人である。一番知られたくない、つい隠している心の奥の感情を、情け容赦なく引つ張り出してきて、舞台の上に乗せてしまう。そう捉えることによつて、見ている者自身が自虐的快感を覚えるような人物の描き方をする。

能〈玉葛〉の中で、シテは恋の妄執に囚われて地獄で苦しんでいる。どうやらそれは、生前の行いによる罪のためではなく、今も続く「恋」という気持ちのためだ。後シテが最初に口にするのは玉鬘巻の巻名、そして女君の名前の由来でもある、玉鬘にとつてはテーマソングとも言うべき、光源氏の歌であ

る。しかもそれを變形して自分の今の状態を述べる歌とする。

恋ひわたる、身はそれならで玉葛、いかなる筋を、たづね来ぬらん。〔下ノ詠〕

シテの現在の状態は「恋ひわたる」つまり、恋という想いが継続している状態である。だから「玉鬘」の名にふさわしくない。恋を敢えて拒絶して賢く振る舞つた、物語の中にいる玉鬘らしくはないのである。

心は恋に乱れていて、成仏できない。彼女は、〈定家〉における式子内親王とは違つて、成仏を願つている。「尋ねても、法の教へに逢はん」という意志を示して姿を現しているのであるから、成仏を望んでいるのだが、そう言いながら狂乱してしまふほどに、心は恋に取り憑かれていく。

〔カケリ〕前後で繰り返されるひと言は、〈玉葛〉では「つくも髪」だが、それは、〔カケリ〕が、どういう状態を表しているのかを端的に表現する象徴的で重要な言葉である。「つくも髪」は、けつして美しさとか若さとか、妖艶さといったイメージの湧かない、むしろ汚いような印象の言葉である。この言葉は、『伊勢物語』六十三段を背景とした、老女というほどの歳になつても恋を求めてやまない、積極的な女を象徴する。

物語のなかで、外に向かつて投げかけられることの無かつた恋心に、死んでから取り憑かれた女である。

払へど払へど執心の、長き闇路や黒髪の、飽かぬやいつの寝乱れ髪、結ばはれ行く思ひかな。〔一セイ〕

払つても払つても去らないどころか、千々に乱れる思い。それはまるで激しい恋の一夜の寝乱れ髪のようなだが、残念ながら彼女にはその具体的な思い出はなく、「いつたいつの夜の」と、自問することになる。「飽かぬ」は闇路が「明けぬ」の意味がかかり、「黒髪」の縁で「赤」でもあるのだが、耳に入つてくる最も中心的な意味はやはり「飽きない」であり、「結ばはれ行く思ひ」が「飽きない」のである。

能〈玉葛〉において玉葛は、想い乱れる心の内側をあらさまに見せ、自由に動き回る。しかも恨みの感情を他者、すなわち光源氏にぶつけるといふ方法はとらない点に、この曲の特色がある。すべて自己の内面の問題として、処理されているのである。この曲には玉葛と右近以外の固有名詞は、光源氏さえも、一つも出てこない。物語の説明はすべて間狂言に任せるといふつもりなのか、あるいは、物語の説明など、観客には蛇足だと、禅竹は考へていたのか。

世阿弥は本説紹介の物語にこそ、夢幻能の面白さがあると考えているようだが、禅竹は物語紹介を目的として夢幻能を作っているわけではないのであろう。禅竹の興味はひたすら、物語の主人公の内面に向けられている。

(横浜国立大学教授)